

日本現代詩とポストモダンの思想

野村 喜和夫*

「日本現代詩とポストモダンの思想」というなにか大層な大仰なタイトルをつけてしまったのですけども、時間の関係上そんなに突っ込んだ包括的な話はできないといますので、自分の実作を中心にですね、半分は思い出話みたいになってしまいかも知れないのですけれども、お話ししたいと思います。

僕が詩を書き初めたのは1970年代なのですね。ご存知の方も、まだ生まれていない方もいろいろかと思いますが、その前の1960年代の後半、末頃というのは、フランスでも68年の五月革命とか、日本でもいわゆる全共闘運動というのが大学を中心に起こっていきまして、ちょっと騒然とした雰囲気があったのですけれども、僕もそうした中で、高校生でしたから、大変な刺激を受けまして、かなり興奮したのですが、ところがですね、大学に入った時は、もう既にそういう運動は収束していきまして、なにかこうがらんとした白けた雰囲気、そういう雰囲気がキャンパスの中なんかを漂っていました。そういう時代に詩を書き初めたのですけれども、当時、詩の世界自体がある種のターニングポイントと言いますか、転換期を迎えていたようでして、ただ詩だけではなくてですね、いろんな文化状況が世界的にターニングポイントを迎えていたのではないかなと、今振り返って思うんですね。1970年代は、非常に大きく捉えれば、近代というもののいろんな限界とかそういうものが露呈されてきて、近代そのものが臨界点を迎えていたという時期なんじゃないかなと思うのですね。近代の終りの始まりと言いますか、そうい

う時期に当たっていたんじゃないかなと思います。

1960年代は「60年代ラディカリズム」なんて言われまして、大変な熱気があったのですね。いろんな詩人たちが生まれまして、吉増剛造さんですとか、天沢退二郎さんですとか、僕なんかはそういう詩人たちの作品を読んで詩を書き始めた一人なのですけれども、本当に活況を呈していたのですが、70年代に入るともう、そういう動き自体も飽和しちゃったというかですね、なんかそういう時代になったのですね、もう現代詩の新人は現れないだろうというくらい言われていました。そんな中で、新しい世代の詩人たちがぼちぼち現れたのですけれども、例えば、荒川洋治という詩人が先頭を走って登場して来ましたが、荒川さんの詩も、その前の世代のラディカリズムと言われるような傾向に比べるとずいぶん冷えているというか醒めているというかそういう詩でして、荒川さんが使っている語彙は、なんと云ったら良いのでしょうかね、戦前むしろそれまでは無視されてきた、戦前の古い言葉を、現代詩の文脈に新たに植え直すみたいなそういう雰囲気がありました。つまり、いわゆるポストモダン建築にちょっと似たようなやり方だったと思うのですけれども、古いものの上になにか接ぎ木していくような形で作品を作って行くという、そういう面から見ますと、既に荒川さんの登場によって、いわゆるポストモダンの傾向が既に表れていたということが言えるんじゃないかと思うのです。

それから荒川さんのずっと前の戦争を体験した世代なのですが、吉岡実という大変優れた詩人

* 詩人

がいました。吉岡実という詩人は、とにかくイメージの創出力が抜群の人でして、実際そういうふうにして、何十年も詩を書いてきた人なのですが、70年代に入りますと、ガラッと作風を変えてですね、いわゆる引用を、引用を全面に出すような方法を用いてですね、人々を、読者を驚かせたというところがありました。ベケットの言葉に「想像力は死んだ、想像せよ」というのがあるんですね、それに吉岡さんはずいぶん刺激を受けまして、自分の中での想像力は死んでしまったけれども、なおかつ想像するためには、他者の言葉を自分の作品の中に織り込んで行く、引用の織物みたいなものを作ってやろうという、そういうコンセプトがあったようです。吉岡実のそのやり方は、正にポストモダンと言えばポストモダンと言えるわけです。70年代になりますと、引用というということでは、入沢康夫さんという詩人も、吉岡実以上に、意識的・戦略的に引用の詩学を進めて行った人ですね。入沢さんはフランス文学系の詩人ですから、もちろんそういうフランスの現代思想とかそういうバックボーンがあったわけですが、吉岡実さんの場合は特にそういうバックボーンはありませんでしたから、やはり世界、時代の空気、世界同時的な時代の空気を吸いながら、「想像力は死んだ、想像せよ」みたいな、そのポジションを獲得していったと思います。

70年代はそういう感じだったのですが、80年代に入りますと、なお一段とポストモダンの状況というのが顕著になって行ったんですね。いわゆる消費文化、あるいは大衆文化と言いますか、あるいは高度資本主義なんて言い方もされていたような記憶がありますけれど、そうした中で従来の教養とか芸術とかというあの地盤、それらを支えていた地盤自体が、基盤自体が、流動化して、場合によっては崩れて行くという、そういう現象が80年代になると顕著になって行ったような気がします。ちょうどそのころですかね、いわゆるニューアカブームというのが興りまして、ニューア

カデミズムというのでしょうか、略してニューアカ、ニューアカブームと言っていましたけど、フランスの現代思想が、一気に、たくさん、大量に、同時に翻訳・紹介されるようになったということです。70年代にももちろんフランス文学者によって、例えば蓮實重彦さんですとか、豊崎光一さんですとか、そういうフランス文学者によって紹介されていたのですが、80年代になると、浅田彰さんですとか、もっと若い世代と言ったらいいのですかね、そういった人たちがどんどん、フランスの現代思想を、日本に紹介し、日本の思想状況と突き合わせるような仕事が出ていったということですね。浅田彰さんはその後なんとなく沈黙してしまいましたけれど、中沢新一さんなんていう人は、その後も旺盛に現代思想を取り入れつつ、自分で自前の思想にもっていったようなところがありますね。そういうニューアカブームというのが80年代に興りまして、そのころちょうど僕も詩集をようやく刊行したりするようになりましたので、そういう時代、80年代の時代の動きと僕の詩作というのが、かなりシンクロしているんですね。

僕の第二詩集、80年代に出した第二詩集のタイトルが『わがリゾート』っていうのですが、ちょっと変なタイトルなのですが、これは実は、ドゥルーズ＝ガタリの有名な概念のひとつである「リゾーム」のもじりなのですね、本当はリゾームにしたかったのですが、ちょっとリゾームでは露骨すぎるということで、リゾートにちょっと変えたというそんな経緯がありまして、第二詩集は明らかにドゥルーズの影響を下で書いたという記憶があります。どれだけドゥルーズの思想を理解していたかどうかは分かりませんが、自分なりにかなり興奮して読んで記憶がありますね。それから第三詩集というのが、これも80年代に書いたものなのですが、『反復彷徨』と言いまして、これも変な、ヘンテコなタイトルですが、さっきの『わがリゾート』と同じで、

タイトルが既にポストモダンのと言いますかね、「反復」というのは現代思想ではやはり重要な概念だと思うのですけれど、そもそもドゥルーズの『差異と反復』を連想させるタイトルですね。「彷徨」というのは「さまよう」ことですけど、これもモーリス・ブランショの『文学空間』を思わせる言葉です。この『反復彷徨』というこのタイトル自体が、フランスの現代思想を読んでいる人には、あ、あれだとピンと来ちゃうような恥ずかしいタイトルということになります。これが第三詩集に当たりまして、刊行したのは1992年なのですが、実際に書いたのは80年代です。いわゆるポストモダニズムの現代詩という、ポストモダニズム詩というものがあつたとすれば、この詩集なんかは、良いにつけ悪いにつけ、その代表的な詩集ということになるのではないかと思うのです。今から読むとちょっと若書きみたいなのところもあるのですが、当時はそういうフランスの現代思想を読みながら、それに刺激を受けて書くというのがひとつの僕のスタイルになっていたものですから、夢中で書いていたような記憶があります。

僕もいろんな本を読んだのですけれども、フランスの現代思想をどう受容したのかというレベルで言いますと、デリダよりもドゥルーズの方が僕の感性に合っていたような気がします。性に合っていたと言うのでしょうか。デリダが非常にタイトなテキストで、それに対してドゥルーズっていうのは、かなりいい加減な、ルーズな、デリダに比べるとドゥルーズが使ういろんな概念なんかの方がかなりいい加減ですしね、あるいはかなり流動的ですし、いい加減さと言うとドゥルーズに失礼なのですが、頭だけではない、身体にまで響いて来るような、デリダは頭だけなのですがドゥルーズの場合は体まで感じて来るようなそういうところがありまして、これは良いなと思

ったのです。つまり、何て言ったら良いのでしょうかね、同伴するならこれだと思ったのですね、この思想と一緒に、この思想から学んで自分の創作をしていこうというふうにかなり真剣に思いました。といっても詩ですからね、思想がすべてではありませんから、限界があるのですけれども。そんなわけで、『反復彷徨』という詩集にはドゥルーズを利用と言うと変ですが、ドゥルーズを意識したところもあります。

そして、80年代のポストモダンの状況の中で、なぜ詩が、特に僕個人の体験で言いますと、なぜ自分の詩がポストモダンのものになって行ったのかということなのですが、それはただ単に、時代の流行とか、あるいは新奇なものを求める、そういう奇をてらったような傾向だけではなかったような気がするのです。僕個人の考えとしては、詩というのは言語による言語の批判だと思うのです。そのつもりでずっと書いてきました。同じ言語を使うのですけれども、日本語なら日本語を使うのですけれども、同時にそれは日本語よりも優れていなければと思ってまして、それはどうということかと言いますと、言語というのは当然、共同体を縛るものですから、法とか権力と結びついているわけです。あるいは言語自体がひとつのシステム、制度ですから、そういうものとして我々にやって来るわけですね、それを批判するというのは、理想を言いますと、言語をアナーキーな状態に置くことによって、その言語がいろんな未知のものとか自由なものが生成されるひとつの新しい場たらしめると言いますか、そういうものに変えて行きたいという根本的な欲望と言いますか、そういうものがあって、たまたまそれがポストモダンのフランス現代思想とシンクロしたのであろうと思われま